

林訳『巴黎茶花女遺事』の語りと文体（下）：作中人物の話法の形式

中里見，敬
九州大学言語文化研究院：准教授：中国文学

<https://hdl.handle.net/2324/26682>

出版情報：東北大学中国語学文学論集．17，pp.75-90，2012-11-30．東北大学中国文学研究会
バージョン：
権利関係：Courtesy: 佛教大学図書館



林訳『巴黎茶花女遺事』の語りと文体（下）

——作中人物の話法の形式——

中里見 敬

前稿では林紘訳『巴黎茶花女遺事』（1899）において、柄谷行人が明治日本の文学について論じた「風景」の発見と並行するような認識論的転換が見出されることを指摘し、そのうえで中国伝統小説とは異なる新たな語りの形式——入れ子の語り（額縁構造）、一人称の語り、日記・書簡による語り——が、物語行為の場面を軽視する傾向はあるものの、中国木版本の版面の視覚効果を巧みに利用しながら読者に受容可能なかたちで、おおむね正確に翻訳されていることを見た¹。本稿ではさらに、作中人物の発話の伝達モード、すなわち話法の問題について考えることによって、バフチンのいう「著者のことばと他者のことばのあいだのまったくあたらしい相互関係」がこの林訳小説において生まれたことを論じたい²。

本稿でも前稿と同じく、最初に林紘訳を引用し³、便宜的な対比の参考として【 】内に現代中国語による逐語訳である王振孫訳『茶花女』（1980）を引き⁴、フランス語原文は注に掲げる⁵。なお、本稿では自由間接話法の問題を論じるので、注にはフランス語原文と対照させるために英語訳も【 】内に示す⁶。林訳で省略された部分は王訳の該当箇所には下線を付し、逆に原文に対応する箇所のない林訳には波線を施す。二重下線は林訳と王訳とが大きくずれる部分である。紙幅の都合により、王訳の改行はスラッシュ「/」で代用する。理解を助けるために適宜、朝比奈弘治氏による日本語訳を付す⁷。

四、中国語における話法の問題

古来、中国のナラティブでは、文言文であれ白話文であれ、語り手が地の文全体を語り、作中人物は語り手の直接話法による引用の中でのみ発話が可能という形式が広く一般的に行われていた。西洋でも基本的に同様であったが、ジェイン・オースティン（1775-1817）あたりから、話法の伝達部を省くことによって地の文にいきなり作中人物の声が響く自由

間接話法の技法が洗練されてきた⁸。その結果、読者は語り手による語りの媒介を経ることなく、作中人物の言葉や思考をより親身に感じ取ることができるようになる。あるいは語り手と作中人物の声の区別が不分明になり、両者が融合するといってもよい。このことを指してバフチンは「著者のことばと他者のことばのあいだのまったくあたらしい相互関係」と言ったのであった。こうした技法が近代小説でとくに顕著な心理主義的な傾向に深く関与していることはいうまでもない。

中国語の話法の問題を考える際には、動詞の時制がなく、人称を示す主語も省略可能であるという中国語の特徴により、西洋諸語のような形式的な判別が困難であることをまずおさえておく必要がある。さらに注目すべき現象として、伝達動詞が存在する話法の形式においても、中国語では「従属節意識」が弱いために、被伝達部に並列された第二節以降は主節と同等の独立性をもち、その結果、自由間接話法と同様の効果を獲得することが申丹によって指摘されている⁹。申丹のいう従属節意識の弱さについて、老舍『駱駝祥子』（1936）の一段を例に見てみよう。

他老想着远远的一辆车，可以使他自由，独立，象自己的手脚的那么一辆车。有了自己的车，他可以不再受拴车的人们的气，也无须敷衍别人；有自己的力气与洋车，睁开眼就可以有饭吃。¹⁰

〔彼ははるか遠くの一台中の人力車、彼を自由にし独立させることができ、まるで自分の手足であるかのようなそんな一台中の人力車のことをいつも考えていた。自分の人力車があったら、車宿の人たちに怒られることももうないし、他人におべっかを使う必要もない。自分の力と人力車さえあったら、目をあければすぐそこにご飯があるってわけさ。〕

下線部「远远的一辆车，可以使他自由，独立，象自己的手脚的那么一辆车。」まで伝達動詞「想着」が効いていることに異論はないだろう。ところが、続く上点部は、これが伝達動詞「想着」の従属節であるのかどうか曖昧で、むしろ従属節意識の弱さにより伝達部から独立した祥子の声のように解釈できる。上点部前半「有了自己的车，他可以不再受拴车的人们的气，也无须敷衍别人；」までは、主語「他」の存在により自由間接話法の形式となっているが、後半の「有自己的力气与洋车，睁开眼就可以有饭吃。」は人称が省略されて自由間接話法とも自由直接話法とも解釈可能なかたちになっている。いずれにせよ文のつながりはスムーズで、作中人物の思考がいきいきと読者に伝わってくる。中国語では主語の省略が頻繁に行われることを考慮して、以下の本稿では自由直接話法／自由間接話法の区別を捨象し、一括して自由式話法（中国語では“自由式转述体”）と呼ぶこととする。

五、林訳『巴黎茶花女遺事』における話法

では、林紘訳『巴黎茶花女遺事』において語り手は作中人物のせりふをどのような形式で引用しているのだろうか。まず、一般的な会話の場面から見てみよう。嫉妬からマルグリットに別れの手紙を出したアルマンが後悔の念に駆られて、翌朝早く二人の仲を取り持つ年増の元娼婦プリュダンスを訪問したときの会話である。

余視配唐，其色甚莊，既而問余曰：“過別馬克乎？”予曰：“未也。”配唐曰：“弗去亦佳。”余曰：“何謂？”配唐曰：“既已絕交，過別何益？”余曰：“馬克之事，予知之乎？”配唐曰：“馬克以絕交書示我矣。”余曰：“馬克何說？”配唐曰：“馬克字我曰：‘竚伯哪爾同來之客，甚無禮也，此書何由見貽！’”余曰：“言時其色若何？”配唐曰：“似嗔非嗔，但曰彼饗我兩席，至今未臨謝也。”（23 葉 b 面/174 頁）

【我望望普律当丝，寻思她是不是在讥笑我。/但是她脸上是一本正经的。/“你是去向玛格丽特告别吗？”她又接着说，脸上还是那么一本正经。/“不是的。”/“这样很好。”/“你以为这样好吗？”/“当然啦，既然你已经跟她吹了，何必再去看她呢？”/“那么你知道我们吹了？”/“她把你的信给我看了。”/“那么她对你说什么啦？”/“她对我说：‘亲爱的普律当丝，你那位宝贝不懂礼貌，这种信只能在心里想想，哪能写出来呢。’”/“她是用什么语气对你说的？”/“是笑着说的，她还说：‘他在我家里吃过两次夜宵，连上门道谢都还没有来过呢。’”（110 頁）¹¹

〔わたしは、からかわれているのだろうかと自問しながら、彼女を見つめました。/しかしその顔は真面目でした。/「マルグリットにさよならを言いに行くつもりなの？」と、彼女は相変わらず真面目な顔でつづけました。/「いや」/「それならいいけど」/「そう思う？」/「もちろんよ。別れたんだから、もう会う必要はないじゃないの」/「それじゃ、別れたってことを知ってるんだね？」/「あんたの手紙を見せてもらったわ」/「それで、マルグリットはなにか言ってた？」/「こう言ったわ。『プリュダンス、あんたのお友達は礼儀を知らないのね。こういうことは頭で考えても、手紙には書かないものよ』ってね」/「どんな調子で、そう言ったの？」/「笑いながらよ。それから、こうも言ったわ。『あの人、うちで二度も夜食を取ったのに、挨拶にさえ来ようとしらないのね』って〕」（朝比奈訳 215-216 頁）

直接話法でせりふの引用が行われている場面である。一見して明らかなように、林訳では原文にはなかった伝達部が補われ（「余曰」「配唐曰」）、発話者が特定しやすくなっている。標点符号が確立する以前の版面は句読点や改行なしで漢字が羅列されるため、このように伝達部を付加することによって誰のせりふかを明示する直接話法が一般的であった（図 1）。一方でそれにより原文のスピード感がそがれることは否めない。原文では、話者を導入す

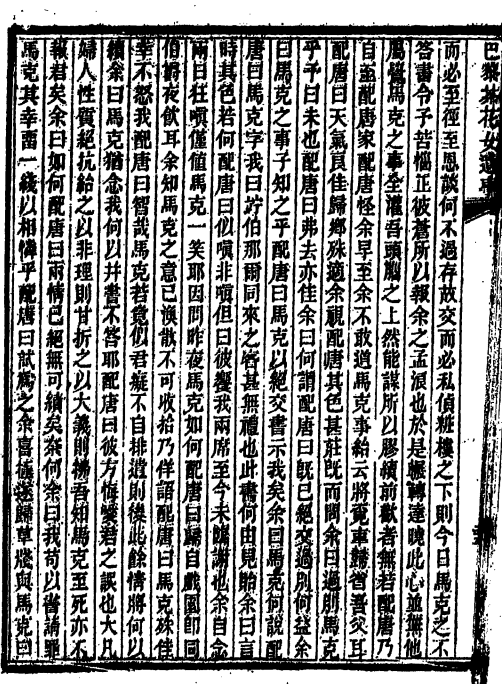


図1 『巴黎茶花女遺事』
(玉情瑤怨館, 1901, 佛教大学図書館
蔵) 23葉a面

AUX CAMÉLIAS. 193

Je n'osai pas lui dire franchement ce qui m'amène. Je lui répondis que j'étais sorti de bonne heure pour aller retenir une place à la diligence de C... où demeurait mon père.

— Vous êtes bien heureux, me dit-elle, de pouvoir quitter Paris par ce beau temps-là.

Je regardai Prudence, me demandant si elle se moquait de moi.

Mais son visage était sérieux.

— Irez-vous dire adieu à Marguerite? reprit-elle toujours sérieusement.

— Non.

— Vous faites bien.

— Vous trouvez?

— Naturellement. Puisque vous avez rompu avec elle, à quoi bon la revoir?

— Vous savez donc notre rupture?

— Elle m'a montré votre lettre.

— Et que vous a-t-elle dit?

— Elle m'a dit: Ma chère Prudence, votre protégé n'est pas poli; on pense ces lettres-là, mais on ne les écrit pas.

— Et de quel ton vous a-t-elle dit cela?

— En riant, et elle a ajouté:

図2 *La dame aux camélias* (Paris: Michel Lévy frères, 1855) p. 193.
<http://books.google.co.jp/books?id=q44GAAAAQAAJ> による

る伝達部がないかわりに、ダッシュ「—」と改行でせりふの話者の交代がテンポよく示されている(図2)¹²。この点について樽本照雄氏は、アレクサンドル・デュマ(大デュマ)著『王妃マルゴ』(*La Reine Margot*)を白話訳した曾孟樸の「馬哥王后佚史」について論じる中で次のようにいう。

もうひとつ、「道」を使ってセリフの主を明示する。

当時の中国では、文章作成に関する記号の使用規則があるわけではない。あるいは、規則はまだ定着していなかった。従来の表示方法を遵守している。せいぜいが「○」を傍点に使う、あるいは固有名詞に傍線を引くくらいだ。曾孟樸の該翻訳は、段落の字下げもなければ、改行すらほどこさない(例外は第2節にある。21-22頁の短文2字さげ。また記号「…」の使用が27、29、34頁の3カ所に見える)。林訳も同じだ。

そういう習慣だから、人物が会話をかわすといってもカッコ記号を基本的に使わない。漢字が連なっているだけだから誰の発言か区別がつかない。そこで採用されたひとつの方法が、話者のあとに「道」(林訳では文言の「曰」)をいちいち補うことだ。話者にとっては発言の合図だからわかりやすい。ただし、上のように翻訳するとするとわずらわしい。¹³

このように標点符号が確立するまでは、伝達動詞「曰」はいわば引用符号の役目も果たし

ていたと考えるべきであって、林訳においても伝達部がくどいほどに繰り返されるのには、文体論的な問題以前に、標点符号の代用という実用的意味合いが大きかった¹⁴。

林訳では上に見たように直接話法の連続で会話を進展させる以外にも、原文の直接話法を叙事化したり、間接話法に変更したりすることによって、文言文のスムーズな流れを作ることがある。先に引用した場面のと、マルグリットがアルマンを訪ねて来る。

(1) 侍者曰：“二婦人至矣。”(2) 余即聞配唐呼曰：“我也。”(3) 余急趨出，見配唐方四週瞻矚，而馬克則兀坐輓櫓之上，凝神若思。(4) 余急至馬克前，緊握兩手，疾首自疚。(5) 馬克笑曰：“相處未幾，此是第三次服罪矣。”(6) 余即告明日將歸，(7) 馬克曰：“知君思親甚篤，然斷不以我之故，遽變初念。(24 葉 a 面/175 頁)

【(1) “先生，” 约瑟夫回来对我说，“是两位太太。” / (2) “是我们，阿尔芒，” 一个嗓子嚷道，我听出这是普律当丝的声音。 / (3) 我走出卧室。 / 普律当丝站着观赏我会客室里的几件摆设，玛格丽特坐在沙发椅里沉思。 / (4) 我进去以后径直向她走去，跪下去握住她的双手，激动万分地对她说：“原谅我吧。” / (5) 她吻了吻我的前额对我说：“这已经是我第三次原谅你了。” / (6) “我明天就要走了。” / (7) “我的来访怎么会改变你的决定呢？(112 頁)】¹⁵

「旦那さま」と、ジョゼフが戻ってきて言いました。「ご婦人がお二人お見えです」 / 「アルマン、あたしたちよ」と大きな声が出て、ブリュダンスだとわかりました。 / わたしは迎えに出ました。 / ブリュダンスは立ったまま、客間の骨董品を見つめていました。マルグリットがソファに座って、なにか考え事をしています。 / わたしは客間に入るなり、真っすぐに彼女のところへ行くと、ひざまずいてその両手を取りました。そして、すっかり感動しながら言いました。「許してください」 / 彼女はわたしの額に接吻して、言いました。「あなたを許してあげるのは、もう三度目よ」 / 「ぼくは明日、パリを出ようかと思っていたんです」 / 「わたしが訪ねてきたからって、その計画を変える必要があるのかしら？」(朝比奈訳 220-221 頁)

まず(1)侍者ジョゼフのせりふを示す伝達部が、原文の挿入句 “me dit Joseph en reentrant” (ジョゼフが戻ってきて言いました) から「侍者曰」と前置に改められる。(2)のブリュダンスの発話を示す伝達部は、原文では “me cria une voix que je reconnus pour celle de Prudence” (大きな声が出て、ブリュダンスだとわかりました) と後置されているが、林訳ではやはり「余即聞配唐呼曰」と前置される。(4)の原文では「わたし」(アルマン) からマルグリットへの発話が “Pardon” (許してください) と直接話法で引用されるのに対して、林訳では「疾首自疚」と語りの地の文で述べられる(叙事化)。さらに(6)では原文の(自由)直接話法が、「余即告明日將歸」(ぼくはそこで明日、帰省する予定だと言った) と間接話法化して語られる。時制のない中国語で直接話法と間接話法の形式的区別は西欧諸語ほど明確で

はないが、「曰」（白話では「道」）が直接話法の標識となるのに対して、ここのように動詞「告」の直後に発話内容が引用される場合は、被伝達部「明日將歸」の独立性は低く、間接話法と見なしてさしつかえないように思う。その結果、林訳では恋のかけひきに狼狽するアルマンの声は地の文の中にかき消され、彼の言動は語り手によるコントロール下に置かれてしまう。一方、かけひきでは一枚も二枚も上手に行くマルグリットのおおらかさは直接話法による彼女自身の声によって印象づけられるのである。地の文と（自由）直接話法の羅列である原文に対して、林訳は必ずしも正確な逐語訳とはいえないものの、かえって話法を操作することにより単調さを回避して、独自の起伏や濃淡を醸し出している。

全体の傾向としては、林訳は伝達部を付加したうえで直接話法をそのままの形式で訳出することが多く、ときには上のように間接話法に変換するなどして叙事の流れを整えることもあるといえよう。他方、原文の間接話法を直接話法に変換する例も、まれに見いだすことができる。次の例は、アルマンが先の別れの手紙を出したことを後悔しながら、返信を待っている場面である。

(1) 坐候久之，侍者歸語：姑娘方睡，書不遽入，醒時自有處分。 (2) 余悔極欲索書回，又患既爲馬克所窺，則大挫丈夫之氣，乃愈思愈歉，不復自持。 (3) 迨已過十二點，則又自咎曰：“此馬克約余相見時也，苟無此書，當在柔鄉深處矣。” (4) 輾轉不知所爲，因奮然曰：“苦候無益，不如向外疏散，久之更歸，當得尺一之書。大凡迫促轉無其事，緩或自至耳。” (22 葉 b 面/173 頁)

【(1) 约瑟夫回来了。 / “怎么样？” 我问他。 / “先生，” 他回答我说，“夫人在睡觉，还没有醒，但是只要她拉铃叫人，就会有人把信给她，如果有回信，他们会送来的。” / 她还睡着哪！ / (2) 有多少次我几乎要派人去把这封信取回来，但是我总是这样想：“信可能已经交给她了，如果我派人去取信的话，就显得我在后悔了。” / 越是接近应该收到她回信的时刻，我越是后悔不应该写那封信。 / 十点，十一点，十二点都敲过了。 / (3) 十二点的时候，我几乎要像什么事也没有发生过似的去赴约会了，(4) 最后我左思右想不知如何来挣脱这个使我窒息的束缚。 / 像有些心中有所期待的人一样，我也有一种迷信的想法，认为只要我出去一会儿，回来时就会看到回信。因为人们焦急地等待着的回信总是在收信人不在家的时候送到的。(106 頁)】¹⁶

〔(1) ジョゼフが戻ってきました。 / 「どうだった？」と、わたしは聞きました。 / 「ええ」と、彼は答えました。「奥様はまだお休みでした。お目覚めになりしたいお手紙をお渡しして、もし返事があればお届けするとのことでした」 / まだお休みとは！ / (2) 二十回もわたしは、すんでのところで手紙を取り返しに行かせるところでしたが、そのたびに心のなかでこう言いました。 / 「もうたぶん渡してしまっているだろう。取り戻させたりしたら後悔しているように見えてしまうぞ」 / そろそろ返

事が来そうな時刻が近づくにつれて、わたしはますます書いたことを強く悔やむようになりました。
/ 十時が鳴り、十一時が鳴り、ついに十二時が鳴りました。/ (3) 正午になったときには、何事もなかったかのように、約束通り彼女に会いに行こうかとさえ思いました。(4) わたしを締めつけている鉄の輪から抜け出すために、どうすればいいか、もうわからなくなっていたのです。/ なにかを心待ちにしている人がよくすぎる迷信ですが、ちょっと外出したら戻ったときには返事が来ているのではないかと、わたしは思いました。待ちこがれている返事というものは、いつでも留守のあいだに届くものだからです。】(朝比奈訳 206-207 頁)

林訳(1)ではジョゼフの発話が伝達動詞「語」に導かれる簡潔な間接話法となっているのに対して、原文ではアルマンの発話の伝達詞“Lui dis-je.”は後置され、ジョゼフの発話の伝達詞は“Monsieur, me répondit-il.”のように“Monsieur”という呼びかけの後に挿入されており、いずれも直接話法である。さらに続いて原文では“Elle dormait!”(まだお休みとは!)というアルマンの声が伝達部を欠いた自由間接話法で現れるが、林訳はこれを省略する。(2)の原文はアルマンの内面の思考が“On la lui a peut-être déjà remise, et j'aurais l'air de me repentir.”(もうたぶん渡してしまっているだろう。取り戻させたりしたら後悔しているように見えてしまうぞ)と直接話法で引用されるが、林訳では思考の部分「既爲馬克所窺，則大挫丈夫之氣」は伝達動詞「患」によって導かれる間接話法となっている。ところが(3)(4)は逆に、原文“À midi, je fus au moment d'aller au rendez-vous, comme si rien ne s'était passé. Enfin, je ne savais qu'imaginer pour sortir du cercle de fer qui m'étreignait. / Alors, je crus, avec cette superstition des gens qui attendent, que, si je sortais un peu, à mon retour je trouverais une réponse. Les réponses impatientement attendues arrivent toujours quand on n'est pas chez soi.”(正午になったときには……いつでも留守のあいだに届くものだからです)では地の文ないし間接話法で表されているアルマンの思考が、林訳では直接話法に変換されて伝達部「自咎曰」「奮然曰」以下にアルマン自身の声として引用される。

ここで作中人物の内的思考が直接話法に変換されているのは決して偶然ではなく、白話小説における思考の引用(某某心中想道……)がセリフの引用(某某說道……)と同じ直接話法によって行われるのを踏襲したものだと思なすことができよう。上に見たように、自由間接話法を省略したり、直接話法を間接話法に置き換えたり、語り手による地の文を直接話法に変換したりと、この一段で林紓はアルマンの心の揺れを翻訳するのに苦心しているように見える。その理由は、中国の伝統的な語りにおいて思考を再現する手段としては、直接話法の形式が優勢で、他に代わりの方法がなかったからだと思われる。

次の二例は、第一次の語り手デュマ・フィスの内面の思考が“Que voulait dire ce mot: Humilité? / Manon reconnaissait-elle dans Marguerite, par l'opinion de ce M. Armand

Duval, une supériorité de débauche ou de cœur?” および “Que pouvait me vouloir la personne qui avait donné ce livre à Marguerite?” と自由直接話法で地の文に現れる箇所であるが、林訳ではそれぞれ「余疑」「余思」という伝達部を補って非自由式の間接話法に改変している。

余疑 “慚愧” 二字，不知所謂，豈馬克生時，亦深悉漫郎之爲人，愧弗如乎？抑豈亞猛以此譏馬克耶？（3 葉 a 面/143 頁）

【“慚愧”这两个字用在这里是什么意思？／根据阿尔芒・迪瓦尔先生的意见，玛依是不是承认玛格丽特无论在生活放荡方面，还是在内心感情方面，都要比她更胜一筹？（16 頁）】¹⁷

「頭を低くして」とはどういう意味だろう？／このアルマン・デュヴァルという男の考えでは、小説の女主人公マノンも、マルグリットにはかなわないと認めているということだろうか？ だがそれは放埒さの点でかなわないということか？ それとも愛情の点でかなわないということか？（朝比奈訳 32 頁）

余思 此人爲馬克所識，何爲見枉？（3 葉 a 面/143 頁）

【送这本书给马格丽特的人要见我干什么呢？（21 頁）】¹⁸

【あの本をマルグリットに贈った人物が、わたしになんの用があるというのだろう。】（朝比奈訳 40 頁）

次の例は、アルマンの父親の介入によって二人の前途に影がさし、悲劇のクライマックスに近づく場面である。アルマンの不安な心情を “Peut-être”（たぶん）の繰り返しでたまたみかける原文の自由間接話法が、「馬克跌於路，病於巴黎」というわずか二句の簡潔な文言文に縮約され、しかも前後の地の文「余乃惴惴然以驚疑……憂患之事，潮湧雲合矣」にはさまれることによって、間接話法の被伝達部に格下げされているように感じる。

已而夜漸深，馬克踪跡益渺，余乃惴惴然以驚疑馬克跌於路，病於巴黎，憂患之事，潮湧雲合矣。（36 葉 a 面-b 面/194 頁）

【然而，夜深了，玛格丽特仍旧没有回来。／我越来越感到焦虑不安，心里紧张得很。她会出了什么事！她是不是受伤了，病了，死了！也许我马上就要看见一个信差来通知我什么噩耗，也许一直到天亮，我仍将陷在这同样的疑惑和忧虑之中。（158-159 頁）】¹⁹

【しかし夜は更けるばかりで、マルグリットは帰ってきません。／不安がじりじりとその輪を狭め、わたしの頭と心臓を締めつけてきました。たぶん彼女になにかが起ったんだ！ たぶん怪我をしたか、病気で倒れたか、もしかしたら死んでしまったのかもしれない！ たぶん今にも使いの者がやって来て、痛ましい事故を知らせるにちがいない！ いや、たぶん夜が明けても、ぼくはなにも知らされないまま、同じ不安のなかに取り残されているにちがいない！】（朝比奈訳 316 頁）

原文の自由直接話法で表現された、マルグリットの身の上を案じるアルマンの心情の切実

さ（「たぶん彼女になにかが起ったんだ！ たぶん怪我をしたか、病気で倒れたか、もしかしたら死んでしまったのかもしれない！ たぶん今にも使いの者がやって来て、痛ましい事故を知らせるにちがいない！ いや、たぶん夜が明けても、ぼくはなにも知らされないまま、同じ不安のなかに取り残されているにちがいない！」）は、この林訳ではほとんど精彩を失っている。

ところが、作中人物の長々とした内面の思考が引用されるとき、林訳は一転して精彩を回復することになる。それは中国語の従属節意識の弱さによって、長い引用の後ろの部分は伝達動詞の支配から独立して、あたかも作中人物自身の声が地の文に響くような効果、すなわち自由間接話法と同等の文体効果が発揮されるからである。パリでの父との面会から帰って来たアルマンは、心配しながらマルグリットの帰宅を待つ。その日の午後のマルグリットの不可解な言動を思い出しながら、アルマンはもの思いにふける。

(1) 余思馬克豈疑我以父命爲託，溷迹至他人許，尾我覘誠僞乎？(2) 又豈配唐以來招之乎？(3) 然余方見配唐，似無其事，(4) 第配唐情態，予初見時即問馬克何以不來，然則配唐固知馬克能來耳。(5) 余憶配唐蹙蹙然又似自咎失言，然則馬克固在配唐家無疑矣。
(35 葉 b 面-36 葉 a 面/193 頁)

【(1) “她可能有什么疑慮，” 我想，“也许是到巴黎去证实我对她说的去看父亲的事究竟是不是一个借口，为的是得到一天自由。/(2) 或者是普律当丝有什么重要事情写信给她了，”(3) 当剩下我一个人的时候我心里想：“但是在我去巴黎的时候已经见到过普律当丝，在她跟我的谈话里面我一点也听不出她曾给玛格丽特写过信。”/(4) 突然我想起了当我对迪韦尔努瓦太太说玛格丽特不舒服时，她问了我一句话：“那么她今天不来了吗？”这句话似乎泄露了她有约会，(5) 同时我又想起了在她讲完这句话我看着她的时候，她的神色很尴尬。(6) 我又回忆起马格丽特整天眼泪汪汪，后来因为我父亲接待我很殷勤，我就把这些事给忘了。(157 頁)】²⁰

【《きっと心配になったんだろう》と、わたしは考えました。《ぼくが父に会いに行くと言ったのが、実は一日自由に過ごすための口実なんじゃないかと思って、それを確かめにパリへ行っただんじゃないかな》/《それともブリュダンスが、なにか重要な相談事があって、手紙を書いてきたのかもしれない》と、ひとりになってから、また思いました。しかしブリュダンスには、パリに着いてすぐ会っています。そのとき、マルグリットに手紙を書いたと匂わせるようなことは、なにも言っていませんでした。/ 突然わたしの頭にひらめくものがありました。マルグリットが病気だと言ったとき、ブリュダンスは《それじゃ、今日は来られないのね？》と言ったのです。待ち合わせでもしていたかのようなこの台詞を聞いて、わたしが彼女の顔を見つめたとき、困ったような様子をしていたのも、同時に思い出しました。このことを思い出すと、マルグリットが一日中涙を流していたことも頭に浮かび、ふたつの記憶が結びつきました。父の優しい態度のせいで、わたしはこの涙のことを少し忘れていた

のです。] (朝比奈訳 313-314 頁)

(1)の原文は、伝達部 “pensai-je” (わたしは考えました) が挿入された直接話法の形式でアルマンの内的思考が引用されているのに対して、林訳では前置された伝達部「余思」によって以下の思考内容が引き出される。ところが、この伝達部「余思」は確かに従属節「馬克豈疑我以父命爲託，溷迹至他人許，尾我覘誠僞乎？」までは支配しているものの、さらに続く(2)「又豈配唐以柬招之乎？」を従属節と見なすか、それとも伝達部から独立した主節と見なして自由式話法と受け取るかは、中国語の統語規則によって決定できず、読者の受け取り方にゆだねられるのである。林訳の(3)「然余方見配唐，似無其事」は、原文 “me dis-je quand je fus seul;” (ひとりになってから、また思いました) の伝達部を省略した自由式話法で、なおかつ原文を大幅に縮約した表現になっている。続く(4)でも、原文の伝達部 “Tout à coup je me souvins” (突然わたしの頭にひらめくものがありました) が省かれ、ようやく(5)で「余憶」という伝達部が付加される。(5)の「余憶」で地の文の語り手の審級が回復されるまで、(1)から(4)までの全体を(1)の伝達部「余思」が支配することは、中国語の従属節意識の弱さによって不可能であり、その結果、上点部(2)から(4)にかけて伝達部から解放された作中人物アルマンの声が直接響くような効果が生まれるのである。

さらに長大な引用では、中国語の従属節意識の弱さによって、上点部は完全に伝達部「自念」から解放され、アルマン自身の声が語りの媒介を経ることなく地の文に響いている。上の引用に続く部分を見てみよう。

(1) 余將日間所見所聞可欣可喜之事，都聚腦間，(2) 既而自念吾父既許我矣，此外復有何恐。(3) 而馬克于午間時，何以慶慶促余至巴黎？直至余許其四點前不離左右，而馬克始略慰意。(4) 豈其中有變幻不可測度之事，用以愚我乎？(5) 或且趁余弗在，捷足先至巴黎，垂歸矣，爲人挽留耶？(6) 何以不告侍者，且默然不留一錢？(7) 而此一副眼淚，何爲而來？而此匆匆他適，何爲而去？(36 葉 a 面/193 頁)

【(1) 想到这里，这天发生的一切事情都围绕着我的第一个怀疑打转，使我的疑心越来越重。(2) 所有一切，一直到父亲对我的慈祥态度都证实了我的怀疑。/(3) 玛格丽特几乎是逼着我到巴黎去的，我一提出要留在她身边，她就假装平静下来。(4) 我是不是落入了圈套？玛格丽特是在欺骗我吗？(5) 她是不是本来打算要及时回来，不让我发现她曾经离开过，但由于发生了意外的事把她拖住了呢？(6) 为什么她什么也没对拿尼纳说，又不给我写几个字呢？(7) 这些眼泪，她的出走，这些神秘莫测的事究竟是什么意思呢？

(158 頁)】²¹

【この瞬間から、今日一日のあらゆるできごとが、最初の疑惑のまわりに集まってきて、わたしの心のなかではっきりした形を取りはじめました。そうすると父の寛大な態度も含めて、すべてがその

疑惑を裏付けているように思えてきました。/ マルグリットはわたしがパリに行くことを、ほとんど強要しました。パリに行かずにそばにいてやろうとしたときには、わざと落ちついたふりをして見せました。わたしは罠に落ちたのでしょうか？ マルグリットは裏切ったのでしょうか？ 家をあけたのを気づかれないように早く戻るつもりでいたのに、なにか偶然の事故で手間取っているのでしょうか？ なぜナニヌに、なにも言わなかったのでしょうか？ いやむしろ、なぜわたしに、何も書き残さなかったのでしょうか？ あの涙は、この不在は、この謎は、いったいどういうことなのでしょうか？】（朝比奈訳 314 頁）

興味深いことに、(2) “que tout le confirma, jusqu'à la clémence paternelle.”（そうなる父の寛大な態度も含めて、すべてがその疑惑を裏付けているように思えてきました）の内容を林紓は「吾父既許我矣，此外復有何恐」（父が私を許してくれたからには、ほかに何を恐れることがあるだろうか）と取り違えているにもかかわらず、(3)以下でアルマンの内心の声を伝達動詞ぬきで連続して引用する部分は、ほとんど原文と遜色のない見事な自由式話法で再現されている。つまり、(2)の原文にはない付加された伝達部「自念」は「吾父既許我矣，此外復有何恐」までしか支配できず、ここでも従属節意識の弱さによって、(3)以下のアルマンの声は語り手の媒介を経ることなく直接、読者に訴えかけてくるのである。

次の例では、原文にはない伝達動詞「想」が(1)と(5)の二箇所に用いられ、アルマンの思考の引用であることが示されるものの、被伝達部はわずかに「馬克此行」「婦人之心」までで、直後に発話者アルマンのモダリティを表す「必」（きっと……したのだろう）や「雖」（……とはいっても）が置かれることによって、アルマンの生き生きとした思考の息づかいが感じられる。

(1) **想**馬克此行，必至巴黎尋覓銷售家具之人，布置移家之局，(2) 防爲余知，不欲以此重拂余意，因背余自行摒擋竟始來招余。觀配唐之久待馬克，則馬克隱衷不難曲繪而出矣。(3) 煩重之事，一日不能遽了，故畱宿配唐家以竟之，或且斯須當來；(4) 雖然，去時痛哭何也？(5) **想**婦人之心，雖極款昵於我，一旦盡去其所有，不能無悲，亦婦人常態也。(36 葉 a 面/194 頁)

【(1) 也许这个可怜的姑娘为她的家具找到了一个买主，她到巴黎接洽去了。(2) 这件事她不想让我事先知道，因为她知道，尽管这次拍卖对于我们今后的幸福十分必要，而且我也同意了，但这对我来说总是很难堪的。她怕在向我谈这件事时会伤了我的自尊心，损害我的感情。她宁愿等一切都办妥了再跟我见面，显而易见，普律当丝就是为了这件事在等她，而且在我面前泄漏了真相。(3) 玛格丽特今天大概还不能办完这次交易，她睡在普律当丝家里，也许她一会儿就要回来了，因为她应该想到我在担忧，肯定不会把我就这样丢在这里的。/(4) 但是她为什么要流泪呢？(5) 无疑是不管她怎样爱我，这个

可怜的姑娘要放弃这种奢侈生活，到底还是舍不得的。她已经过惯了这种生活，并且觉得很幸福，别人也很羡慕她。(158 頁)】²²

【『かわいそうに、マルグリットはきっと、家財を買ってくれる人が見つかったんで、話を決めにパリへ行ったんだろう。ぼくには秘密にしておきたかったにちがいない。いくら承知したといっても、ぼくたちの将来の幸福のために、彼女の財産を売らなければならないのは、ぼくには苦痛だということがわかっているからだ。話をすれば、ぼくの自尊心やデリカシーを傷つけることになるかと心配したんだろう。全部ひとりで片づけてから姿を見せようって腹にちがいない。もちろんブリュダンスは、そのために彼女を待っていて、ついぼくの前でぼろを出しそうになったんだ。今日は結局、話がまとまらなくて、マルグリットはパリの家に泊まることにしたんだろう。でなければ、今すぐにも帰ってくるかもしれない。ぼくが心配しているってことはわかってるんだから、黙ってぼくを放っておくはずもないだろう。／でもそれなら、あの涙はなんだったんだ？ たぶん、ぼくを愛してはいても、これまで慣れ親しんで、自分も楽しみ、人からも羨まれていた、あんな贅沢な暮らしを捨てるとすると、やっぱり泣かすにはいられなかったんだろう。かわいそうに』】(朝比奈訳 315 頁)

アルマンとマルグリットの別離という物語のクライマックスが迫る場面で、上に見たようなアルマンの内面描写が多く見られる。「可憐一巻茶花女，断尽支那蕩子腸」²³と言われるほどまでに当時の読者の心をつかんだのは、物語内容もさることながら、自由間接話法に匹敵する作中人物の発話の伝達モードを駆使した文体——語り手の媒介を経ずにマルグリットに対する真摯な感情を吐露するアルマンの声——であったといえるのではなかろうか。

六、おわりに

以上見てきたように、林訳『巴黎茶花女遺事』において作中人物の言葉や思考は、基本的に伝達部(「余曰」)を付加した直接話法の形式によって再現されることが多く、「曰」以外の伝達動詞を用いる間接話法もまま見られた。ところが、たとえ伝達部が存在しても、中国語の従属節意識の弱さによって、被伝達部の第二節以下は伝達動詞の支配から解放されて、あたかも作中人物が語り手の媒介を経ずに、直接読者に語りかけてくるような効果を発揮していた。作中人物の長大な思考の引用は、事実上、中国語の自由式話法と見なしでも差し支えないような文体効果を有しており、『巴黎茶花女遺事』ではそのような文体がとりわけアルマンの内面を描出するのに有効に用いられている。

このような現象を可能にした言語的要因として、文言文では語り手の声と作中人物の声との間に語気(ないし個人方言 idiolect)の差異が比較的小さいことがあげられる。そのために従属節意識の弱さによって両者が融合する自由式話法の文体効果が生じていた。か

りに林紓が白話文で翻訳したならば、白話小説の語り手と作中人物の語気には顕著な違いが現れるため、たとえ直接話法による長大な伝達であっても、被伝達部の最後まで従属節であることが意識され、語り手と作中人物の声の区別は維持されやすいと考えられる²⁴。前稿で述べた文言文のジャンルの多様性によって一人称の語りがスムーズに受容されたのと同様に、自由式話法を創出するにあたって、林紓は文言文のもつ表現可能性を存分に発揮していたということができよう。近代小説の諸要素を備えた「完璧な傑作」*La Dame aux camélias*はこうして見事な中国語に置き換えられ、中国に「著者のことばと他者のことばのあいだのまったくあたらしい相互関係」、すなわち文学の近代性をもたらしたのである²⁵。

¹ 中里見敬「林訳『巴黎茶花女遺事』の語りと文体（上）：「風景」／「内面」の発見と語りの形式」（『東北大学中国語学文学論集』第16号, 2011）

² ミハイル・バフチン、桑野隆訳『マルクス主義と言語哲学（改訳版）』（東京：未来社, 1989）225頁。

³ テキストは小仲馬原著、冷紅生輯『巴黎茶花女遺事』（玉情瑤怨館, 1901, 佛教大学図書館蔵）により、葉数・表裏を記した。施蛰存主編『中国近代文学大系』第11集第26巻・翻訳文学集1（上海：上海書店, 1990）所収『巴黎茶花女遺事』の頁数も付した。原テキストに標点符号はないので、大系本により補った。ただし、大系本の標点符号を一部改めた箇所もある。

⁴ 小仲馬著、王振孫訳『茶花女』（北京：人民文学出版社, 1980）。引用は2010年第3次印刷版による。

⁵ フランス語原文は、Alexandre Dumas fils; introduction et commentaires d'Henri Béhar, *La Dame aux camélias* (Paris: Pocket, 1998) による。引用に際し、原文の改行箇所はスラッシュ「/」で代替した。

⁶ 英語訳は、Alexandre Dumas fils; translated by Edmund Gosse; with a new introduction by Toril Moi, *Camille: The Lady of the Camellias* (New York: Signet Classic, 2004) による。改行はスラッシュとした。

⁷ 日本語訳は、アレクサンドル・デュマ・フィス、朝比奈弘治訳『椿姫』（東京：新書館, 1998）による。改行はスラッシュとした。

⁸ Katie Wales, *A Dictionary of Stylistics* (New York: Longman, 1989) pp. 189-193 参照。【日本語訳：豊田昌倫ほか訳『英語文体論辞典』（東京：三省堂, 2000）189-194頁】【中国語訳：王守元・張徳禄主編『文学辞典』（済南：山東教育出版社, 1996）】

⁹ 申丹『叙述学与小説文体学研究』（北京：北京大学出版社, 1998）362-363頁。

在西方语言中，间接引语与无引号的直接引语之间除了人称上的差别，还有时态上的明显差别。除此之外，间接引语中转述语为从句，其开头往往有引导从句的连接词（英文中的“that”、法文中的“que”等），而不带引号的直接引语中的转述语为主句，转述语的第一个字母一般大写。在汉语中不存在这种明显的主从句差别。[西洋の言語では、間接話法と引用符のない直接話法との間には、人称の区別以外に、さらに時制の明らかな区別がある。それ以外に、間接話法における被伝達部は従属節となり、その先頭にはたいてい従属節を導く接続詞（英語の“that”、仏語の“que”など）が置かれるのに対して、引用符を欠いた直接話法における被伝達部は主節となり、被伝達部の最初のアلفベットは一般に大文字で書く。中国語においては、このような主節と従属節のはっきりとした区別は存在しない。]

¹⁰ 老舍『駱駝祥子』（『老舍文集』第3巻，北京：人民文学出版社, 1982）6頁。日本語訳は拙訳。

¹¹ Je regardai Prudence, me demandant si elle se moquait de moi. / Mais son visage était sérieux. / « Irez-vous dire adieu à Marguerite ? reprit-elle toujours sérieusement. / — Non. / — Vous faites bien. / — Vous trouvez ? / — Naturellement. Puisque vous avez rompu avec elle, à quoi bon la revoir ? / — Vous savez donc notre rupture ? / — Elle m'a montré votre lettre. / — Et que vous a-t-elle dit ? / — Elle m'a dit : “Ma chère Prudence, votre protégé n'est pas poli : on pense ces lettres-là, mais on ne les écrit pas.” / — Et de quel ton vous a-t-elle dit cela ? / — En riant et elle a ajouté : / “Il a soupé deux fois chez moi, et il ne me fait même pas de visite de digestion.” » (XIV, p. 144)

[I looked at Prudence, asking myself whether she was laughing at me, but her face was quite serious. /“Shall you go and say good-bye to Marguerite?” she continued, as seriously as before. /“No.” /“You are quite right.” /“You think so?” /“Naturally. Since you have broken with her, why should you see her again?” /“You know it is broken off?” /“She showed me your letter.” /“What did she say about it?” /“She said: My dear Prudence, your *protégé* is not polite; one thinks such letters, one does not write them.” /“In what tone did she say that?” /“Laughingly, and she added: ‘He has had supper with me twice, and hasn’t even called.’” (p. 136)]

¹² Google Books (<http://books.google.co.jp/books?id=Ec45AAAAcAAJ>) で確認した初版本 (Bruxelles: Lebegue, 1848) の第一巻では、会話の連続部分にダッシュはあるものの、改行はされていない。Google Books は第一巻しか掲載していないため、第二巻にあたる引用部分は確認できなかった。

¹³ 樽本照雄「曾孟樸の初期翻訳 (上)」(『清末小説』第 32 号, 天津: 清末小説研究会, 2009) 35-36 頁。

¹⁴ 錢鍾書「林紓的翻譯」(錢鍾書等『林紓的翻譯』北京: 商務印書館, 1981) 43-45 頁も同じ問題を取り上げて、次のようにいう。

小説里报导角色对话, 少不得“甲说”、“乙回答说”、“丙也说”那些引冒语。外国小说家常常用些新鲜花样, 以免连行接句的“你说”、“我说”、“他说”, 读来单调; 结果可能很纤巧做作, 以致受到修辞教科书的指摘。中国文言里报导对话也可以来些变化, 只写“曰”、“对曰”、“问”、“答”而不写明是谁。更古雅的方式是连“曰”、“问”等都干脆省掉, 《史通》内篇《模拟》所谓: “连续而脱去其‘对曰’、‘问曰’等字”; (引用略) 都不是常规, 而是偶例。《巴黎茶花女遗事》却反复应用这个“古文”里认为最高简的方式: (引用略) 值得注意的是, 在以后的林译里, 似乎再碰不到这个方式。第二部林译是《黑奴吁天录》, 书里就不省去“曰”和“对曰”了 (例如九章马利亚等问意里塞、二十章亚妃立向托弗收)。錢鍾書『管錐編』第 1 冊 (北京: 中華書局, 1979) 「左傳正義六七則」 「六五 哀公七年 對話省“曰”字」には、伝達部を省略した発話の引用例を、変文や白話小説を含めて多数引き、次のようにいう。

西文有引語符號, 記言却未克擯“曰”、“云”、“問”、“答”等字而不用; 十八世紀一小説家於此等字能應無盡無, 遂自鳴匠心獨運焉。(247-248 頁)

¹⁵ — Monsieur, me dit Joseph en rentrant, ce sont deux dames. /— C’est nous, Armand », me cria une voix que je reconnus pour celle de Prudence. /Je sortis de ma chambre. /Prudence, debout, regardait les quelques curiosités de mon salon ; Marguerite, assise sur le canapé, réfléchissait. /Quand j’entrai, j’allai à elle, je m’agenouillai, je lui pris les deux mains, et, tout ému, je lui dis : « Pardon. » /Elle m’embrassa au front et me dit : /« Voilà déjà trois fois que je vous pardonne. /— J’allais partir demain. /— En quoi ma visite peut-elle changer votre résolution ? (XV, p. 147)

【“Sir,” said Joseph coming back to me, “it is two ladies.” /“It is we, Armand,” cried a voice that I recognised as that of Prudence. /I came out of my room. Prudence was standing looking around the place; Marguerite, seated on the sofa, was meditating. I went to her, knelt down, took her two hands, and deeply moved, said to her, “Pardon.” /She kissed me on the forehead, and said: /“This is the third time that I have forgiven you.” /“I should have gone away to-morrow.” /“How can my visit change your plans? (p. 139)]

¹⁶ Joseph revint. /« Eh bien ? lui dis-je. /— Monsieur, me répondit-il, madame était couchée et dormait encore, mais dès qu’elle sonnera, on lui remettra la lettre, et s’il y a une réponse on l’apportera. » /Elle dormait ! /Vingt fois je fus sur le point de renvoyer chercher cette lettre, mais je me disais toujours : /« On la lui a peut-être déjà remise, et j’aurais l’air de me repentir. » /Plus l’heure à laquelle il était vraisemblable qu’elle me répondît approchait, plus je regrettais d’avoir écrit. /Dix heures, onze heures, midi sonnèrent. /À midi, je fus au moment d’aller au rendez-vous, comme si rien ne s’était passé. Enfin, je ne savais qu’imaginer pour sortir du cercle de fer qui m’êtreignait. /Alors, je crus, avec cette superstition des gens qui attendent, que, si je sortais un peu, à mon retour je trouverais une réponse. Les réponses impatientement attendues arrivent toujours quand on n’est pas chez soi. (XIV, p. 139)

【Joseph returned. /“Well?” I said to him. /“Sir,” said he, “madame was not up, and still asleep, but as soon as she rings the letter will be taken to her, and if there is any reply it will be sent.” /She was asleep! /Twenty times I was on the point of sending to get the letter back, but every time I said to myself: “Perhaps she will have got it already, and it would look as if I have repented of sending it.” /As

the hour at which it seemed likely that she would reply came nearer, I regretted more and more that I had written. The clock struck, ten, eleven, twelve. At twelve I was on the point of keeping the appointment as if nothing had happened. In the end I could see no way out of the circle of fire which closed upon me. / Then I began to believe, with the superstition which people have when they are waiting, that if I went out for a little while, I should find an answer when I got back. (pp. 130-131)]

¹⁷ Que voulait dire ce mot : Humilité ? / Manon reconnaissait-elle dans Marguerite, par l'opinion de ce M. Armand Duval, une supériorité de débauche ou de cœur ? (III, p. 41)

[What was the meaning of the word Humility? Was Manon to recognise in Marguerite, in the opinion of M. Armand Duval, her superior in vice or in affection? (p. 22)]

¹⁸ Que pouvait me vouloir la personne qui avait donné ce livre à Marguerite ? (IV, p. 46)

[What could the person who had given the book to Marguerite want of me? (p. 28)]

¹⁹ Cependant, la nuit avançait et Marguerite n'arrivait pas. / L'inquiétude resserrait peu à peu son cercle et m'étreignait la tête et le cœur. Peut-être lui était-il arrivé quelque chose ! Peut-être était-elle blessée, malade, morte ! Peut-être allais-je voir arriver un messenger m'annonçant quelque douloureux accident ! Peut-être le jour me trouverait-il dans la même incertitude et dans les mêmes craintes ! (XXII, p. 201)

[Nevertheless, the night went on, and Marguerite did not return. / My anxiety tightened its circle little by little, and began to oppress my head and heart. Perhaps something had happened to her. Perhaps she was injured, ill, dead. Perhaps a messenger would arrive with the news of some dreadful accident. Perhaps the daylight would find me with the same uncertainty and with the same fears. (p. 200)]

²⁰ « Elle est capable d'avoir eu des craintes, pensai-je, et d'être allée à Paris pour s'assurer si la visite que je lui avais dit aller faire à mon père n'était pas un prétexte pour avoir un jour de liberté. / « Peut-être Prudence lui a-t-elle écrit pour quelque affaire importante », me dis-je quand je fus seul ; mais j'avais vu Prudence à mon arrivée, et elle ne m'avait rien dit qui pût me faire supposer qu'elle eût écrit à Marguerite. / Tout à coup je me souvins de cette question que M^{me} Duvernoy m'avait faite : « Elle ne viendra donc pas aujourd'hui ? » quand je lui avais dit que Marguerite était malade. Je me rappelai en même temps l'air embarrassé de Prudence, lorsque je l'avais regardée après cette phrase qui semblait trahir un rendez-vous. À ce souvenir se joignait celui des larmes de Marguerite pendant toute la journée, larmes que le bon accueil de mon père m'avait fait oublier un peu. (XXII, pp. 199-200)

[Perhaps she had some suspicion or other, I thought, and went to Paris to make sure that my visit to my father was not an excuse for a day off. Perhaps Prudence wrote to her about something important. I said to myself when I was alone; but I saw Prudence; she said nothing to make me suppose that she had written to Marguerite. / All at once I remembered M^{me}. Duvernoy's question, "Isn't she coming to-day?" when I had said that Marguerite was ill. I remembered at the same time how embarrassed Prudence had appeared when I looked at her after this remark, which seemed to indicate an appointment. I remembered, too, Marguerite's tears all day long, which my father's kind reception had rather put out of my mind. (pp. 198-199)]

²¹ À partir de ce moment, tous les incidents du jour vinrent se grouper autour de mon premier soupçon et le fixèrent si solidement dans mon esprit que tout le confirma, jusqu'à la clémence paternelle. / Marguerite avait presque exigé que j'allasse à Paris ; elle avait affecté le calme lorsque je lui avais proposé de rester auprès d'elle. Étais-je tombé dans un piège ? Marguerite me trompait-elle ? Avait-elle compté être de retour assez à temps pour que je ne m'aperçusse pas de son absence, et le hasard l'avait-il retenue ? Pourquoi n'avait-elle rien dit à Nanine, ou pourquoi ne m'avait-elle pas écrit ? Que voulaient dire ces larmes, cette absence, ce mystère ? (XXII, p. 200)

[From this moment all the incidents grouped themselves about my first suspicion, and fixed it so firmly in my mind that everything served to confirm it, even my father's kindness. / Marguerite had almost insisted on my going to Paris; she had pretended to be calmer when I had proposed staying with her. Had I fallen into some trap? Was Marguerite deceiving me? Had she counted on being back in time for me not to perceive her absence, and had she been detained by chance? Why had she said nothing to Nanine, or why had she not written? What was the meaning of those tears, this absence, this mystery? (p. 199)]

²² « La pauvre fille aura trouvé un acquéreur pour son mobilier, et elle sera allée à Paris pour conclure. Elle n'aura pas voulu me prévenir, car elle sait que, quoique je l'accepte, cette vente, nécessaire à notre bonheur à venir, m'est pénible, et elle aura craint de blesser mon amour-propre et ma délicatesse en m'en parlant. Elle aime mieux repaître seulement quand tout sera terminé. Prudence l'attendait évidemment pour cela, et s'est trahie devant moi : Marguerite n'aura pu terminer son marché aujourd'hui, et elle couche chez elle, ou peut-être même va-t-elle arriver tout à l'heure, car elle doit se douter de mon inquiétude et ne voudra certainement pas m'y laisser. / « Mais alors, pourquoi ces larmes ? Sans doute, malgré son amour pour moi, la pauvre fille n'aura pu se résoudre sans pleurer à abandonner le luxe au milieu duquel elle a vécu jusqu'à présent et qui la faisait heureuse et enviée. » (XXII, pp. 200-201)

【Probably she had found a purchaser for her furniture, and she had gone to Paris to conclude the bargain. She did not wish to tell me beforehand, for she knew that, though I had consented to it, the sale, so necessary to our future happiness, was painful to me, and she feared to wound my self-respect in speaking to me about it. She would rather not see me till the whole thing was done, and that was evidently why Prudence was expecting her when she let out the secret. Marguerite could not finish the whole business to-day, and was staying the night with Prudence, or perhaps she would come even now, for she must know how anxious I should be, and would not wish to leave me in that condition. But, if so, why those tears? No doubt, despite her love for me, the poor girl could not make up her mind to give up all the luxury in which she had lived until now, and for which she had been so envied, without crying over it. (pp. 199-200)】

²³ 嚴復「甲辰出都呈同里諸公」（王栻主編『嚴復集』第2冊，北京：中華書局，1986）365頁。

²⁴ たとえば『水滸伝』第39回の以下の一節では、語り手と宋江の語気には明らかな差異が認められる。

宋江看了，心中暗喜，自誇道：「這般整齊肴饌，濟楚器皿，端的是好個江州！我雖是犯罪遠流到此，却也看了些真山真水。我那里雖有幾座名山古跡，却無此等景致。」獨自一個，一盃兩盞，倚闌暢飲，不覺沉醉，猛然驚上心來，思想道：「我生在山東，長在鄆城，學吏出身，結識了多少江湖上人，雖留得一個虛名，目今三旬之上，名又不成，功又不就，倒被文了雙頰，配來在這里。我家鄉上老父和兄弟，如何得相見？」（『李卓吾批評忠義水滸傳』二，『古本小說集成』上海：上海古籍出版社，1991。4葉b面～5葉a面）

中里見敬「呉語人『恨海』における内面引用の形式」（『言語科学』第39号，福岡：九州大学大学院言語文化研究院言語研究会，2004）では、被伝達部の形式を考察する中で、一人称代名詞・呼称・ダイクシス・反語・副詞・感嘆詞を取り上げて作中人物の語気を探った。語り手と作中人物による個人方言（idiolect）の差異を包括的に論じるには、語彙・文法・発音のすべて、およびそれらの選択の結果である言い回し（diction）を問題にする必要がある。もう一つの問題として、中里見敬「『内面』を創出する：文体論的アプローチ」（『日本中国学会報』第56号，2004）では、呉語小説における内面思考が呉語ではなく官話で引用されることから、作中人物の発話は直接話法によってその語気が再現されやすいのに対して、内心の思考は間接話法化されて語り手による調整を被る傾向のあることを指摘した。

²⁵ 西永良成「解説」（西永訳『椿姫』光文社古典新訳文庫，東京：光文社，2008）476頁。朝比奈弘治「解説「椿姫」：近代の愛の神話」（朝比奈訳『椿姫』東京：新書館，1998）も参照。

（謝辞） 図1の掲載に際して、佛教大学図書館よりご厚意を賜った。資料の閲覧にあたり、上海師範大学教授の徐時儀先生および九州大学大学院比較社会文化学府の裴亮氏よりご高配を賜った。フランス語については、九州大学大学院言語文化研究院教授の阿尾安泰先生よりご教示を賜った。記して謝意を表したい。